

雜談
衣食住

永井龍男

雜談衣食住

講談社

雑談 衣食住

昭和四十八年六月二十四日 第一刷発行

著 者 永井龍男

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二 郵便番号 一―二二
電話 東京(〇三)九四五―一―一一(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 星野精版印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

定 価 七九〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
© 永井龍男 一九七三



目次

四季雜記

芝居を見に行く	11
法師蟬まで	21
赤とんぼ・蜂・鈴虫	24
町のうらない師	28
歯と鼻	30
数え日	35
年の内・門の内	39
独楽の紐	43
手袋のこと	47
みくじの枝	49
ゆでたまご	52
屏風絵と蟬丸	53
旅四泊	56
夕立	60

世間雜記

ばらの通知	77
名人上手	79
合唱	81
手品師一座	83
順法ということ	85
初ひぐらし	88
こうもり	90
八幡宮にて	93
乾杯	95
草の種	98
かんじんなこと	101
猿芝居	104
公害のほかに	106
大寒に近く	108
番付の内外	110

無駄ごっこ

便利病の症状

試験

いわゆる居士

縁の下の力持ち

たしかに春が

彼岸に近く

作家の肖像

山のこだま

清明

ピンポンの会

花移る

潜水艦

大人の責任とは

出たところ勝負

蛙

分厚さとは何か

梅雨のテレビ

玄人というもの

長寿のねうち

ここ半年

一円と十九億

パチンコ・プロ

応答一束

黙って見ている

横丁の隠居とNHK

味噌汁は一日の始まり

暑中見舞

川奈と赤倉と

私の好きな言葉

177 174 173 170 166 163

157 154 152 150 148 146

東京の昔

大震災の中の一人

ライスカレーとカツレツ

銀座の少年劉生

大東京繁昌記

二昔三昔

わが寄席行燈

文学雑記

新聞記事

ふるさとここに

原稿料の味

書と人間

268 263 259 255

230 205 202 198 188 181

人と作品

枯木ということ	273
中山義秀を偲ぶ	293
「台上の月」より	303
銀座と文士	307
はせ川の会合	313
この頃の井伏さん	316
東京人	326
鞍馬天狗以上	329
今文化庁長官への期待	331
林さんの新作	335
百本杭	337
かまくら句会	343
風貌	346
あとがき	349

雜談

衣食住

四季雜記

芝居を見に行く

先日数年振りに、歌舞伎を見物した。

招かれたのでも誘われたのでもなく、狂言と一座の顔触れを見て、出かける気になった。珍しいことであった。

昼の部は十一時開演ということで、切符がとれてみると鎌倉からは九時に家を出なければならず、その朝は少々気持がはずまなかった。新橋で横須賀線を降りると、調子外れなほどよい天気の日ざしを浴びながら急いで車に乗りかえるなど、およそ歌舞伎見物という気分ではなかったが、数年前三宅坂の国立劇場へ行った時よりはましと思うことにした。東京で育った者には、三宅坂という土地と観劇というものが、いつまでたってもとけ合わない。つい近くに宮城があったり警視庁があったり、オペラや新劇ならばとにかく、芝居という雰囲気には遠い。これは私だけの感覚ではあるまい。

その時は誘われて、やはり歌舞伎見物に行ったのだが、芝居も中途半端で一向におもしろくなく、もう来るものかと思った。名門といわれる座頭格の役者が、歌舞伎の一座を脱けて新しい劇団を結成、人気女優と共演していたりしたのが、なにかのきっかけで久振りに本格的な一座を組んだので、見に行かぬかと誘われた訳だったが、芸はすっかり荒れていて佻しい限りであった。今度の数年振りは、それ以来の気まぐれであった。

そこへいくと、歌舞伎座は町の中にあり、すぐそばが銀座である。大阪も京都も名古屋も、芝居小屋といわれた頃から、劇場は賑やかな町の中であって、市民の生活につながっていた。市民に親しみを感じさせないような劇場で、演劇が育つ訳はないのである。

さて当日の狂言はどれもそれぞれに楽しく、来てよかったと思った。歌右衛門がよく、富十郎が懸命に勤めたし、清元の志寿太夫がこの一二年急に冴えてきたのにも感心した。現在歌舞伎役者が何百人いるか、それに附随して日本音曲の演奏家が何千人いるか知らないが、みんな好きで選んだ道である。子供の時から修業して一本立ちになるのだが、このうちから何人の名人達者が出るものだろう。名人達者は、その才能がすぐれているから世に認められるのだが、それだからといって一人の力で栄光に浴するのではない。好きでこの道に生きる何百人何千人の集団のバックがあつて芸が生きているのである。歌舞伎の場合は特に家柄というものが尊重され、いまもって名門の後継者はその血縁によるという伝統、あるいは因襲が守られているが、近來

脇役が目立って不足し、芝居狂言を味のないものになっている。

芸能界が多様化するにつれて、下づみで苦勞をするよりも、手っとり早く名をあげる道を選ぶからであろう。何代目の何五郎が新たに誕生するとか、何代目の何右衛門を誰それが襲名するとかは興行政策であって、芝居の内容とは関係ない。年期の入った脇役のめつきり減ってしまった現状こそどうするつもりであろう。

それともう一つ、舞台の照明がやたらに明るくなる一方なのが腑に落ちない。若手のうちとはにかく、芸に脂ののってきた中年過ぎの役者があのようにあからさまに照らし出されてはやり切れまいと思う。立役ですらそう思われるのだから、女形となればさぞ氣を使うことであろう。だから、この頃の白粉の厚ぬりはたいへんなものだ。これはテレビの舞台中継にも罪があるので、如何に歌右衛門が名優であっても、テレビのアップで画面一杯にうつし出されれば、眼をそむけざるを得ないようなことになる。

芝居の舞台には、舞台全体の雰囲気があつて、それが芝居を盛り上げるのだが、映画からきた手法のアップで、一人の人物を大寫しにしてみせたのでは、舞台装置も効果も、不用のものになってしまう。

お客さんは、相変らず団体が多く、そういう人たちはおとなしく、あるいは無感動とも思われる様子で椅子に身を傾けていた。歌舞伎を見物にくるならば、歌舞伎と新国劇のまげ物の相

違くらいは知った上でないと、ちっともおもしろくあるまいと、ひそかに私は思った。高慢なことをいうのではない、判らない言葉があったら辞書を引くようなもので、機会あるごとにそういう心がけをすれば、その人の一日が充実する。

生花や茶を習うにしても、ピアノの手ほどきを受けるにしても、同じような心がけがあれば、ただ単に技術を習得しただけのことではなく、花を愛し茶を愛する生きた心がうまれてくる。身だしなみとは、ほんとうはそのようなものをいうのではないか。この頃は急に俳句を作る人の数がふえたという話だが、ただ五七五に季題を入れて、句の形にまとめてみても、一向たのしいものではない。習った通りに床の間へいけた花と同様、心が添っていない。花を愛さず花の美しさを生かしていないように、言葉に心を托さず季節に心が触れていない。そういう句は、退屈しのぎにパズルを解くのと少しもかわったところのない業である。

俳句を作るのにそんな人は、と思うかも知れないが、何々結社の機関誌をひろげると、実にそういう退屈しのぎの句が多い。おそらく、花をいけるにも茶をたてるにも、あるいはピアノを習うにしても、これと同じことがいえるのではないか。

私はよくいう、あなたの割烹着のポケットに手帖を一冊入れておいて、仕事の途中でなにか思いついたことがあったら、ちょっと手を拭いてメモをしておきなさいと。

それが歌になるか俳句になるか、もっと他の感想になるかはその人、その場合の心境による